

柿崎のいわし籠

2020年10月に下田市教育委員会藤井建彦さんから、田牛の青少年の家（旧田牛小学校）に保管してあるイワシを蓄養したと思われる籠を処分したいが、伊豆分場で引き取ってもらえないかと問合せを受けました。分場の施設が新しくなったので、ひょっとして展示スペースがあるかと思ったようです。

早速、田牛青少年の家に行き、籠を確認しましたが、未使用でかなり大きいものでした（写真1、直径、高さとも1.5m位）。未使用であることは魅力的でしたが、新設となった伊豆分場の展示ホールには大きすぎたのでお断りました。

しかし、貴重な品と思われたので、他に受け取ってくれるところを藤井さんと相談していました。話を持ち掛けるためには、籠に関する確かな情報（本当にイワシ蓄養に使われたのか？）が必要と思われました。

頭に思い浮かんだのは、元筑波大学下田臨海実験センター技官の植田一二三さん（柿崎在住）でした。20年ほど前に植田さんに海藻群落の聞き取り（分場だより304号）をしたときに、下田湾内で地曳網でカツオ船のために活餌をとり、売っていたという話を聞いていたからです。同じく元筑波大学下田臨海実験センター技官の土屋さんを通じて、柿崎でのイワシ地曳網に関する話を聞かせてもらいたいとお願いしていたところ、2021年2月18日に実現しました。

植田さんのお話は興味深く、記録しておく価値があると思

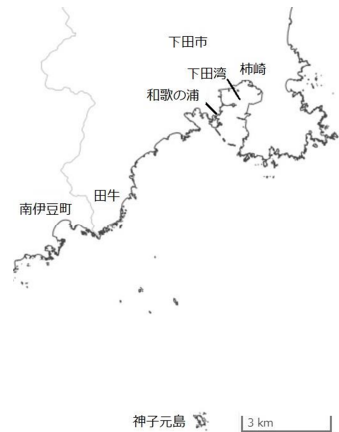


図1 関係箇所の位置



写真1 田牛青少年の家に保管してあったいわしを活かしたと思われる籠（2020年10月撮影）

いましたので、以下に載せます。

- ・これは地曳網で獲ったイワシや他の魚の活かし籠で間違いない。昭和30（1955）年以前に使われていた。
- ・柿崎には地曳網が6か統あった。高浜（たかんば）、浜浦、七兵衛屋、呑三、つるや、忠右衛門。
- ・イワシはカタクチイワシ。6月ごろ獲れなくなった。
- ・下田にカツオ船が10隻あり、イワシを渡していたのは廣漁丸、文盛丸、一丸、源漁丸等。地曳網毎に渡すカツオ船は決まっていた。
- ・神子元でカツオが釣れたので、すぐ餌として持っていった。
- ・網の順番はくじ引きで決めた。網を半分曳いたら、次の番が網を曳くことができた。早く曳けと言っていた。それだけ、イワシがいた。
- ・昭和30（1955）年頃には地曳網はあまり操業していないが、なんとか見つけたのが、下の写真。浜は広く、網を干せた。



写真2 柿崎の地曳網操業風景

- ・昭和30（1955）年頃は籠ではなく、しゅろ縄で編んだ網いけすだった。4角で、1～4間。2間が多かった。4間になると網が重かった。
- ・いけすを沖に持っていく時は、沖に船で錨を打ち、沖からしよびいた。それを繰り返して、沖に設置した。
- ・和歌の浦近くの雁島周辺にもイワシのいけすがあった。深いので、籠ではなく、4角、8角のいけす。下田のせいとく丸（清徳丸？）が下田湾内で船でまいた。
- ・籠やが今のファミレス：ジョナサンのところにあつたらしい。昔は田んぼで籠が置いてあつたのを見たことがある。

以上のように、植田さんによって、柿崎で使われたイワシの活かし籠であることが確認できました。その後、静岡県立中央図書館のデジタルライブラリー¹⁾に昔の絵葉書が収蔵されていることを知り、キーワード検索に「伊豆下田名所 柿崎弁天

島」と入力すると、弁天島を背景に浜に同じ活かし籠が転がっている画像を見つけることができました。ここでも柿崎の活かし籠であることが確認されました。なお、キーワード検索に「伊豆下田名所 循環道路」、「下田名勝 循環道路」、「南伊豆名勝 循環道路」と入力すると、植田さんの聞き取りにあった雁島周辺のイワシのいけすの画像を見ることができます。

さて、次は寄贈先です。これは程なく目当てが見つかりました。沼津市旧御用邸内にある沼津市歴史民俗資料館では沼津の静浦漁協元参事の足立実さんの聞き書きを資料集として発刊しています²⁾。この32～35 ページにイワシの蓄養とその背景のカツオ漁業の記載があり、沼津ではイワシの活籠を“イキョ”と呼んでいたこと、竹製が使われたのは明治の終わりから大正にかけてなどが記されており、竹製のイキョの写真が載っていました。それはまさしく田牛の青少年の家に保管されていたいわし籠と同じで、この籠の安住の地は沼津市歴史民俗資料館であるように思われました。藤井さんから沼津市歴史民俗資料館に引き取って頂けるか問い合わせてあります。無事、いわし籠にとって安住の地が得られることを期待します。

付録 農林統計から見た地曳網

柿崎の実態：農

林統計から得た経営体数、漁獲量の推移を図1に示しました。農林統計では1956年から1962年に経営体数が、1954年から1971年に漁獲量が掲載されていました。経営体数は1956年の6経営

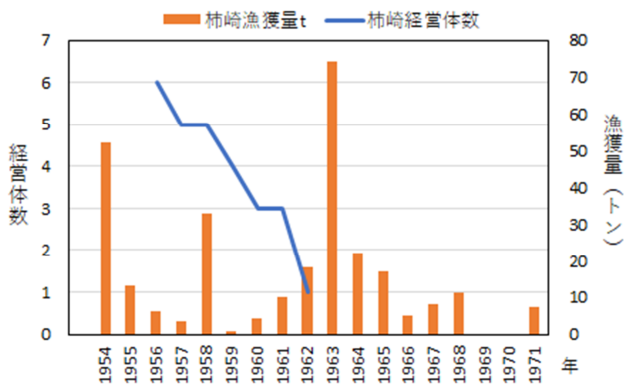


図1 下田市柿崎地区の地曳網の推移

体から漸次減少し1962年には1経営体になりました。漁獲量は、変動が激しく、1～74 トンの間を変動していました。1972年以降は統計値がゼロでしたので、1971年まで操業が行われていたと想像できます。

観光地曳網：関東農政局静岡統計情報事務所は1971年に「静岡県の観光漁業」³⁾を刊行しました。高度経済成長時代に海のレジャーやレクリエーションが発達するなか、漁業が観光に進出・変貌していく現状や問題点をまとめたもので、当時の知

事竹山祐太郎氏が表紙の題字と巻頭言を書いた力のこもった冊子です。その中で観光地曳網の出現について、次のように報告しています。

「静岡の地曳網は5年前に比べて半減した（1970年132経営体）。原因は魚類の減少、労働力不足から起こる経営不振である。地曳網の起源は村張り、網組といった地域社会安定の目的で始められ、引き継がれているものが多い。このことから地曳網は共同経営体が70%を占め、経営意欲は低く、高齢労働力構成から漁業権保持的の操業が多い。しかし、近年観光漁業の需要増大に伴い、観光地曳網が脚光を浴びつつある。この観光地曳網は県中部地区に集中している。これは久能周辺のイチゴ狩り観光農業の発達に伴い、観光地曳網需要の増加を見たもので、安定性に富んでいる観光漁業の構想を描き、新しい漁業を創出する絶好のチャンスとも言える。」

現在でも、観光地曳網は沼津、清水、遠州灘地区で行われているとともに、伊東や土肥などの観光協会が宿泊者の体験として期間を限って行っています。

静岡の地曳網は日本一？：農林統計は2008年から調査項目が減らされて、地曳網に関する統計数値は公表されていません。それ以前の全国の統計値を見ていて、面白いことに気付きました。図2に2004年の地曳網経営体数と漁獲量について全国に対して占める静岡県の割合を示しました。経営体数では静岡県が68でなんと1位（24%）でした。そのうち沼津市の経営体数が41で、我が国で最も地曳網が多い市町村は沼津市でした。しかし、漁獲量では4位に落ち込んでいました。これは、漁業生産性が低いことを表しています。前述した観光地曳網の兼業の結果、漁業よりも観光地曳網に傾倒した結果かも知れません。統計年が2004年と20年近く前なのが残念ですが、現在も経営体数では1位なのか是非とも知りたいところです。

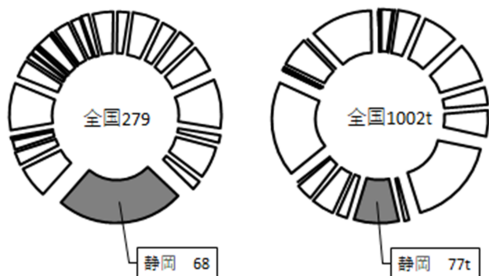


図2 静岡県地曳網の地位 (2004年)

(左：経営体数、右：漁獲量 黒：静岡、白：他の道府県)

文献

- 1) 静岡県立中央図書館デジタルライブラリー ふじのくにアーカイブ <https://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/contents/library/index.html>.
- 2) 駿河湾の漁～聞き書き 足立実さん

の漁話～、2003、沼津市歴史民俗資料館資料集20.

- 3) 関東農政局静岡統計情報事務所編集 (1971) 静岡県の観光漁業 昭和45年度、静岡農林統計協会、112p. (長谷川雅俊)